釣れ釣れなるままに

２０１３年思い出の釣行記 PART.　１４

鹿島釣狂

竿道会第８回大会

湯浅伸一氏から１１月１０日の札幌竿道会へのお誘いをいただいた。前回の岩見沢釣遊会の大会で持って行った仕掛けのほとんどを根掛かりで失ってしまったので、あわてて１０組ほどを作ってみた。根掛かりに懲りて仕掛けに少し工夫を施した。１０号ナイロンの仕掛け糸の先に５号のナイロン糸を電車結びで結んで捨て糸とした。ゴロ針の親針には漁師が使っているというマス針を結んでみた。マス針は軟らかく出来ていて、針先が岩に掛かった時はハリが伸びて岩から離れてくれるのだ。また、伸びてしまった後でも指先で強く押すと元に戻って再使用することが可能なのだ。

竿道会の釣りバスは美唄から岩見沢を経由して札幌に向かうということで、わざわざ札幌に向けて車をとばさなくてもよい。午後６時過ぎに指定された集合場所に着くと、すでにバスが到着しており、岩見沢からは顔見知りの５名が乗った。そして、札幌市場付近で強者ぞろいの竿道会会員全てを乗せて一路様似港へと目指した。私は山田会長や事務局長から直接ご挨拶をいただき、お客さんとして紹介されたが、皆さんから大きな拍手をいただいて誠に恐縮してしまった。バスの座席の前後は旧知の菅原氏、山田氏、荻野氏、湯浅氏、矢根氏で緊張する事もなく最近の釣り情報を交わすことができた。なにより竿道会のメンバーは朗らかな御仁が多くて、大きな声でジョークをとばすものだからバスの中がドッと笑いの渦に巻き込まれるのだ。「忘れ物」の話になり、普段は物静かな矢根氏でさえ「俺は元地方公務員だから痴呆になった」とくだらない親父ギャグをとばしていた。「竿道」会と聞くと、名前からして家庭から「勘当」されるような偏屈ばかりだと思いがちだが、正に釣りの道を究めようとしている「感動」会であった。

Ｈ氏が竿を忘れた。何でも自家用車から竿を下したまではよかったのだが、リュック等の荷物をバスに積んでいる最中に竿袋だけ積み込むのを忘れてしまったのだ。それで竿を貸してくれる者がいないかとバスの中で聞いて回ると奇特な仲間がいたのだ。自家用車の傍に置いた竿が無くなってしまうのではないかと心配されたが、気を利かした知り合いが預かっていてくれたそうだ。彼はその借りた竿１本を打ち返して見事６位入賞を果たした。

黄色い霧雨

私の釣り場は、他会の大会なので一度も入った事の無い下笛舞に入る予定でいた。しかし、本日は、台風並みの風が吹き、波も５ｍ以上出るという大時化を予報していたので、

おそらく笛舞は釣りの出来る状態にはないだろと急遽様似港に入ることにした。竿道会のメンバーは比較的時化に強い近浦や新浜に入る人が多いようだった。

会所前で菅原、矢根、山田氏と一緒に降りた。何人かが一緒だと心強い。途中で菅原氏、山田氏と別れて矢根氏と私はエンルム岬の東側に向かった。風は強く正面から吹いてくるが波は２枚程度でまだまだ釣りになる状況だった。

私と矢根氏は根境に入って並んで釣りを開始した。しかし、アタリは出ない。まだまだ干潮時間帯だったので矢根氏は早々にエンルム岬の先端に向かった。私は平盤の前に出て粘り強く打ち続けているとガクンと竿を伸されるアタリが出て４０㎝程のカジカがあがった。今日は釣りものがほとんど無いだろうとバッカンに水を汲んでそのカジカを入れている最中に、チョコチョコとしたアタリが出た。ハゴトコでも悪戯しているのだろうかと竿先を見つめているとググッと竿先がくい込み竿尻があがった。慌てて竿に飛びついてリールを巻くとハゴトコの下に４５㎝程のカジカが大口を開けていた。さあ、これからだと思うが潮が混んできて足首が浸かるようになってきてしまったので、やむなく舟揚場に待避せねばならなくなった。矢根氏もソイ２、カジカ１の釣果で戻ってきて最初に打っていたところでやり始めた。

舟揚場に入った頃には、風がその凄さを増してきて、荷物を吹き飛ばされないようにと金属製の波止壁の際に避難させた。そして、その波止壁に向かって用を足している最中に雨が落ちてきたようだった。風に煽られた雨が霧雨のようになって顔に降り注いできたのだ。しかし、よく見るとどうも雨ではないようだ。私が用を足したモノが波止壁に遮られ、それが強い風に噴き上げられた飛沫となって私の顔に向かってきていたのだった。

波止壁の際に荷物を避難させた

竿道会に再び感動！

舟揚場では３本のカジカを追加した。しかし、立っていられないような風になり矢根氏が先に港の中に避難していった。波が高くなってきていたのは確かだが、まだまだ釣りは出来る状態だったが、自分の身が危険に晒されるような状況では続けているわけにはいかない。私も港に避難することにした。港に行ってみると風はエンルム岬に遮られて嘘のように静かだった。山田氏、矢根氏、菅原氏がそれぞれ思い思いの場所に入って釣りをしていたがあまり芳しい釣果ではない。私は菅原氏の横で竿を出させてもらったが一度のアタリもないままに締め切り時間を迎えてしまった。

釣りバスは１０時の予定を変更して９時に新浜を出発した。携帯で会員の動向を探りながら乗せて来たのだ。携帯になかなか出ない矢根氏を港に迎えに行くと、最後に４５㎝の本アブラコを仕留めて意気揚々と帰ってきた。

この大荒れでは何所も釣りにならなかっただろうと思っていたが、審査にはゴロゴロと大物カジカが出てきた。優勝は１７２２点の大沼光男氏、準優勝は１６８４点の泉清氏、３位は１５６２点の島川昌幸氏が獲得した。３人とも新浜の釣果で、釣り開始から大荒れだったが２時間ほどは釣りになったらしく、その時間帯に釣り上げたものらしい。竿道会さすがである。感動した。

防波堤の内側は波がなかったが魚もいなかった。

優勝した大沼光男氏の魚

本日の私の釣果、残念ながら１０位に終わった

岩見沢釣遊会第７回大会

１１月１７日（日)、平成２５年度第７回大会が八雲港～森港で開催された。１週間前の札幌医釣会は同じ範囲で大会が開かれたが、優勝者が沼尻で４０㎝以上のカジカを揃えていた。他の会員も特段の大物はいなかったが、かなりの数のカジカを出したとあるから、カジカの岸寄りは進んでいることが伺えた。

私は、昨年、登山用具を携行して崖下りまでして臨んだ湯ノ崎にもう一度挑戦しようと考えていた。昨年は干潮時に防潮堤の下で大きくはないがカジカやアブラコを順調に釣り上げて３位入賞を果たしたのだ。今年の潮は釣り場に着いた時は、満潮に向かって潮が混んできている頃で、防潮堤の下で竿を出すことは叶わないが、何とも魅力的な釣り場だったのだ。さらに、天気予報も上々で最終戦に相応しい釣り日和が約束されていた。

バスの中でそんなことを話していると、ボナさんから、鷲ノ木に一緒に行ってみないかと誘われて少し心が動いたが、予定通り桂川でバスから下りた。岡氏、佐々木氏、前野氏も一緒に下りて、彼らは桂川周辺に釣り場を求めていった。湯の﨑への踏み分け道の入り口には昨年まではなかった鉄製の大きな柵が車の進入を防いでいた。柵の横からその道を進んでいくと所々路肩が崩れて崖になりそれが踏み分け道近くまで迫っていた。なるほど車で進んでしまったらこの崖を落ちてしまうことになるだろう。

崩れた崖を遠巻きに避けながら進んでいくと釣り場に入る目印となるコンクリートの構造物を見逃してしまって、更に奥へと入ってしまった。道全体が大きく崩れて人一人でも先には進めないようになっていた。そこから下りていけそうな気もしないではないが、無理はできない。今年は防潮堤の上からの釣りと考えてロープを持ってきていないのだ。昨年入ったところまで戻って、防潮堤の脇に続く平地に鬱蒼と茂ったイタドリを踏み倒して竿を振れる空地をつくった。まだ潮が低いために磯に降りて竿を振ることが出来そうだがここも無理はできない。

イタドリを踏み倒して竿の振れるスペースを作った

泥に埋まってしまった磯

ハサミを忘れてしまった。最近は丸ガツオを事前に切り分けることもなく、市販のパックに入った３枚に卸した塩ニンニクカツオをそのまま持ってきて、現場の状況に応じてカニ切りバサミで切り分けながらハリに刺していたのだ。このカニ切りバサミは非常に優れもので、私の太い指でも持ちやすくて大きな力を入れることが出来るのだ。切れ味も鋭くてホッケの頭はもちろんのこと、シャケやカジカの頭でさえ切り落とすことが出来るのだ。

忘れないようにとエサ入れバッカンに入れておいたのだが、最後のコマセの始末にハサミを使ってつい忘れてしまったのだ。悪い事に万が一のためにとリュックの底に忍ばせてある小刀をも、荷物をできるだけ軽くしようという思いで置いてきていたのだ。仕方なく仕掛け入れの中に入っていた糸切りばさみを使った。カツオを一気に切ることはできずにチョキチョキと何度もハサミを入れながらの作業となった。始末の悪い事に今回のカツオはやけに分厚くて硬い。針先が出ないので魚が食いついてもすっぽ抜けると思い、その身を削ぎ取る作業も必要だったのだ。エサにアカハラも用意したのだが糸切りばさみでは全く歯が立たなかった。

左：忘れたカニ切りバサミ　中央：代わりに使った糸切りバサミ　右：持ってこなかった小刀

更に難儀したのはコマセである。前回の竿道会の大会で菅原氏が使い残したマグロをいただいて持ってきていたのだが、ネチャネチャなのだ。余ったゴロを絞り出して混ぜていたのが殊更粘りのあるものに変えていたらしい。高い防潮堤の上なので海水を汲むことはできず、三脚に吊るすバケツには崩れた崖にへばり付いていた石ころを入れて間に合わせていた。それで手を洗うこともできないのだ。ネチョネチョと手にへばり付いたマグロのコマセを手拭いでふき取るのだが、手拭いもネチョネチョになって気持ち悪いのだ。

それでもようやく準備が出来て何とか竿を振り込むことが出来た。早く魚を集めるようにと３本の全てに両天秤ゴロコマセネット仕掛けを近投した。すぐにグー、グーと竿先が引っ張られた。見ていると魚の明確なアタリでなくゴミが絡んだことが分かる。防潮堤の際まで行って海を眺めると、背後からの満月に照らされて、浮遊しているゴミが道糸に纏わりついている。更に昨日までの大荒れで海水が黒く濁っていた。白い花崗岩で出来た石原だったはずの海底が泥に埋まったかのように黒ずんで見える。

近投にはゴミが付くので、ゴロやコマセネットを外して全てを遠投にした。しかし、昨年はあったはずの根掛かりがほとんどない。仕掛けを引っ張っても石原独特のゴツゴツとした手ごたえはなく砂泥の上を引っ張っている感じなのだ。根が完全に埋まってしまったらしい。

それでも時たま竿を揺らす魚のアタリで何とかチビアブラコやチビカジカが来て６本に

なったが、４時半の満潮時間帯を迎えてアタリも途絶えてしまった。今日は最後までここで粘ろうと決めてきた手前、それでも竿だけは振り込んでいたのだが、ピクリともしない竿先に嫌気がさしてとうとう移動することにした。空は白々と明けはじめていた。使わなかったゴロやコマセが余計に重たく感じた。

桂川河口には大漁会のＫ氏がいたが、アブラコ２本の貧果だった。更に進むと縦に突き出た砂防堤を挟んで前野氏、岡氏が粘っていた。佐々木氏は河口でやっていたのだが、ゴミに悩まされてとうとう違う所に移動したということだ。私は、河口右に竿を設置した。近投ではやはりゴミが付くので遠投にした。根掛かりはないのでかなり沖まで泥に覆われていることが分かる。そして、ここでも最後まで釣りものはなかった。

審査に提出した６本の魚

審査結果

審査結果

優　勝	南　勝	１４６０点	(カジカ　３９４㎜+アブラコ３８６㎜+６８００g)	鷲ノ木
準優勝	岩本　満	１１８６点	(カジカ　３３３㎜+アブラコ３３３㎜+５２００g)	山　越
３　位	吉井　博	１１６７点	(アカハラ３６５㎜+アブラコ３６０㎜+４４２０g)	落　部
４　位	前野達志	１１３２点	(カジカ　３７２㎜+アブラコ３００㎜+４６００g)	桂　川
５　位	阿部雅美	１１１０点	(アブラコ３５５㎜+カジカ　３１５㎜+４４００g)	山　越

今年度の最終大会であり今回の成績で年間成績が決まるということで誰もが鼻息を荒くしてゲートに入ったはずだった。特に年間優勝のデットヒートを繰り返してきた岡氏と嵐氏に加えて、後半戦の追い込みに鞭が入った佐々木氏も両氏の成績如何ではトップに躍り出る可能性を残しており、それぞれに胸に秘めるものがあったことだろう。

しかし、この範囲では釣り場に熟知していない岡氏、佐々木氏は桂川を選択してしまった。岡氏や佐々木氏には「桂川は年間優勝を争っている者が入るところではない」と言っておいたのだが、他に入るところもなく結局桂川に下りてしまった。桂川はゴロタ浜のカジカ場だったのだが、一昨年の工事現場の泥が流出してしまって釣り場と言えないような浜に変貌していたのである。岡氏は釣りものが無い中、最後まで釣りを諦めることはなかった。そんな折に３５㎝には満たないタカノハを釣り上げて、最後は大物タカノハに夢を託したようだった。

それでもって、優勝者は鷲ノ木に入りカジカ、アブラコを揃えて１４６０点を出した南氏であった。この成績は彼のブログ「ボナさんの北海道釣り三昧」に載せると思われるから、今年の成績を見て来年入ろうと思っている方は大きなしっぺ返しを食うことだろう。私もその一人なのだが・・・。

準優勝は、山越を熟知した岩本氏だった。岩本氏は１週間前の札幌医釣会の大会でも４０㎝余りのカジカをゴロゴロ釣り上げて準優勝していたのだ。３位は落部に入った吉井氏であった。審査時にアカハラが口をパクパクさせていたのを見ると、終了時間間際に釣り上げたものらしく、彼の粘りが釣遊会では１位の成績をもたらしたのであろう。４位は桂川に入った前野氏だった。湯ノ崎にいた私が彼に電話を掛けた時には、小物ばかりで数も揃わないと言っていたのだが、それから粘って既定の魚をそろえ、明け方はタカノハ狙いに切り替える余裕をみせていた。

身長優勝は総合では下位に甘んじた嵐氏だった。落部川でアカハラのみで５．８５㎏の重量を稼いだが、ノ木偏ではなく女偏の付く家が捕れずに、「この区間でのカジカの釣り方がわからないので教えてくれ」と言う有様だ。しかし、岩見沢に到着した時にこのアカハラを超える異魚種を出した。嵐氏がアカハラをバタバタと釣り上げている未明にアカハラとは違う大物が彼の竿を伸したのだ。最初の１本は持ちこたえられずに道糸を切られてしまったが、２本目は浜をかけずり回りながら見事釣り上げてしまったのだ。何でも上バリのカツオに食らいついて来たものだそうで、婚姻色が入った雄だったため、奥様からは持ち帰らないで欲しいと懇願されたそうだ。婿のもらい手はバスの運転手に決まった。

余ってしまったマグロのコマセやゴロは、来年の為に冷凍しておこうと思って持ち帰った。帰りのバスの中でそんなことを呟いていると、嵐氏がそばに来て「ゴロを混ぜるな。粘り気が強くなりネットから出づらくなる。マグロは－５０℃まで冷える冷凍庫でなくては、４月までに油焼けして使い物にならなくなる。お前の家の冷蔵庫では無理だろう。」と言われてしまった。持ち帰ったマグロやゴロは仕方なく、畑の肥料となった。

さて、本年度の大会は今回をもって終了となるわけだが、どの大会も週末の荒れ模様の中でも比較的天気に恵まれた大会であった。いかんせん私の成績は振るわなかったが来年は何とか今年を上回る成績を残したいものだ。

左から準優勝：岩本氏、優勝：南氏、３位：吉井氏